

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



泊原発が「とまり」、 「脱原発」が動き出した！

2012年5月5日午後11時3分、北電泊原発3号機が定期検査に入り、日本国内にある54基すべての原発が運転停止状態となりました。もちろん、福島第一原発の事故終息が実現しないかぎり、不安が消えることはありませんが、「脱原発」の第一歩を踏み出したことにまちがいはありません。今、政・官・財とマスコミの大半、いわゆる「原子力村」は、総力を上げて、大飯原発を再稼働しようとしています。これは、ただ単に、自分達の存在意義、いや利権を手放したくないというエゴによるものです。私たちは、40年以上もの長い間、彼等にだまされ続けてきました。

しかし、そのウソが誰の目にも明らかになりつつあります。①「放射能の脅威」は、完全防備で現地入りした政治家たちが、自らのいでたちで証明しました。②「原発の安全神話」は、放射能を閉じ込める「五重の壁」が一瞬にして破壊したことで、もろくも崩れ去りました。③「原発の経済性」は、莫大な交付金や揚水発電のからくり、放射性廃棄物の処分費用などをごまかしていたことが明らかとなり、すでに破綻しています。そして、今、④「原発の必要性」（電気が足りなくなるといっておどし）が声高に叫ばれていますが、消費電力量のピークの水増し、火力発電所や揚水発電所のサボタージュ、他電力会社・民間企業からの買電や節電効果の過小評価などがばれ、10%以上余力があるということが分かっています。私たちが、真実を見抜く目を持てば、絶対に原発の再稼働を阻止することができます。今回の福島原発事故を教訓として、圧倒的多数の日本人が「ウソやごまかし」に気づいています。泊原発が「とまり」、「脱原発」がスタートしました。私たち大人は、5月5日（こどもの日）を永遠の記念日として、子ども達に残さねばなりません。

(J)



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00 ~ 17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

5月5日は、日本の歴史にとって新たなページを開く記念日となるかもしれない。1970年に若狭湾から大阪万博会場に初めて商業用原発の電気が送られて以来、42年間にわたって日本人は原発に頼って生きてきた。原子力村の科学者やそれに便乗した無知な政治家たちに、無理やり原発依存症にさせられてきた、と言った方が正確だ。

今、多くの政治家たちも、表向きは「脱原発依存」と唱えざるを得ない状況になった。しかし、それは福島の大震災者たちの多大な犠牲の結果である。原発の再稼働を許してはならない。再稼働を唱える人々は、福島の、そしてチェルノブイリの人々への想像力に欠けた人々である。この夏、原発なしで乗り切ろう。それが脱原発への第一歩である。

もんじゅ廃止、それが脱原発の始まり

既に何度も書いてきたことだが、脱原発の始まりは「核燃料サイクル幻想」を断ち切るしかない。原発が始まって以来42年、原子力村の科学者達は、「資源小国の日本は、燃えないウラン(238)を燃えるプルトニウム(239)に転換出来る高速増殖炉が必要だ」と主張してきた。それが出来れば、核燃料資源は今の100倍になるというのである。それは、彼等にとっても夢ではあった。しかし、既に20年以上も前に、高速増殖炉でプルトニウムが増えないことは明らかだった。プルトニウム倍増時間が100年以上かかることが、明らかになったからである。技術的に短縮は可能だが、それには炉心の密度を限りなく核兵器に近づける必要があり、危険性もまた明らかである。アメリカを始め欧米各国が、早々と核燃料サイクル幻想から撤退したのは、それなりの理由があった。しかし、日本の科学者たちは違った。彼等ほんじゅが稼働しようとしまいと、存在すればそれで良かったのである。もんじゅは、ナトリウム火災を起こした1995年以来、17年間殆ど止まったままである。にも関わらず、維持費は一日当たり5900万円もかかる。年間210億円である。冷却剤のナトリウムが固まらないよう200℃を維持するために、他の発電所からの大量の電気(2万4千世帯相当)を使い、人件費・管理費など維持費も必要である。それは、「夢の実現のための必要経費」という名目であった。実際は、こうした費用は全て原子力村の住民達の懐に入る。もう、夢から醒めなければならぬ。もんじゅが止まれば、必然的に青森県の六ヶ所村再処理工場も不要になる。再処理工場は、使用済み燃料からプルトニウムを分離し、「もんじゅの燃料を作る」というのが目的だからである。アメリカは、カーター大統領時代に高速増殖炉を諦めて以来、再処理工場も全て解体した(兵器用は除く)。5月23日、「文科省は、もんじゅ廃炉も含めた核燃料サイクルの見直しに着手した」と伝えられた。原発依存症患者たちが、一日も早く目覚めることを期待したい。

脱原発は廃炉時代の始まり

原発を運転すれば、放射性廃棄物が出る。これも、原発運転開始以来の課題だった。原子力村の専門家達は、この問題についても「いずれ何とかなる」と主張してきた。しかし、既に明らかのように、未だに解決

策はない。「核燃料再処理で出来る高レベル廃棄物は、いずれ国内のどこかの地下深くに埋設し、レベルが自然放射能に近くなるまで10万年間安全に保管できる」と、彼等は主張してきた。これを信ずる人は誰もいない。最大の問題は、原子力村住民達の時間感覚の麻痺である。もんじゅにせよ廃棄物にせよ、「いずれ何とかなる」という主張で、他人だけでなく自らをも騙してきた。放射能は、人間の力では処理できず、物理的半減期による消滅を待つしかない、これは誰にも否定しようのない科学的事実である。原発を運転すればするほどそれが増える事は素人にも分かる。しかし、政府も専門家も廃棄物問題の解決をこれまで先送りし、原発増設に邁進してきた。福島原発事故は、いずれやってくる廃炉時代の放射性廃棄物問題の深刻さを、事故という形で私たちに見せつけたのである。汚染瓦礫問題は、今や全国を揺るがしている。政府は、廃炉に伴って出る大量のスソ切り廃棄物(クリアランスレベル)の処理方針を、福島事故前の2010年11月に決めていた。放射性セシウムは100Bq/Kg以下ならば、ただのゴミとして埋め立てたり、リサイクルしたりしても良いことになった。しかし、福島事故で状況は一変した。「8000Bq/Kg以下は、ゴミ処分場に処分し、将来その上に家を建てたり、農業を行ってもかまわない」とする指針を発表し、それを根拠に全国自治体に汚染瓦礫の処分協力を迫っているのである。これまで先送りしてきた廃棄物問題を、放射能の全国拡散という方式で解決しようとしている。福島県内の瓦礫や汚染土壌は、「とりあえず中間貯蔵し、いずれ県外で処分」などと言っているが、これも問題の先送りではない。最終処分こそが国民の関心であり、未来がどうなるかの判断材料である。

放射能は拡散してはならない

これが、放射能から身の安全を守るための基本である。政府は、これまで先送りしてきた原発廃棄物問題を、瓦礫処理問題にすりかえ、廃炉廃棄物の処理につなげようとしている。これは国民全体の安全の根幹に関わる。しかし同時に、これまで原発エネルギーという麻薬に浸ってきた国民の責任もまた、問われることになろう。福島の人々の犠牲は、私たちの未来を顕在化したのである。この重い問題にどう対処するかも、脱原発時代の課題である。しかし、諦めずに取り組むしかない。(河田)

定期総会 & チェル救デーのご案内

東京電力福島第一原発の事故による放射能汚染との戦いが始まってから、1年が経ちました。チェルノブイリ原発事故の被災者支援の経験を生かしながらも、まったくの手さぐりで始めた福島支援。そして、5ヶ年計画の5年目を迎えた菜の花プロジェクト。2011年度も「救援・中部」は、東に走り、海を渡って西へと、盛りだくさんの活動を行ってきました。

上がる一方の平均年齢ですが、幸いにも(?)定款に定年制はなく、「生涯現役」を目指して走り回っています。1年に一度の総会ですから、現地の最新情報を生の声で伝えます。励まみや辛口批判をお聞かせください。2012年度の活力にさせていただきます。

当日、お会いできることを楽しみにしています。ぜひご出席ください。(市原)

■ 日 時 6月16日(土)

午後1時15分～4時45分

■ 場 所 ウィンクあいち 9階908室(旧:中小企業センター)

● JR名古屋駅南口から ミッドランドスクエア方面 徒歩5分

● 名古屋ユニモール地下街 ⑤番出口 徒歩2分

*** 東日本大震災一周年に当って 日本の皆さまに ***

チェルノブイリの消防士慈善基金代表 B.チュマク (訳: 河田いこひ)

昨年(2011年)の3月11日、膨大な数の日本人の命が失われ、未来が壊されたことに対して、ウクライナの人々は、自分達の心に痛みと悲しみの印を刻みました。その3月11日から一年が過ぎました。まさにこの日に、日出ずる国の上に、地球規模の悲劇が陰を落としたのです。衝撃。我が惑星に暮らす人々によって受けとめられた悲劇は、一言で言うならまさに衝撃でした。この巨大な災難の規模に、全世界が驚きました。

ウクライナ民族は、もしかしたら他の誰よりも深く、日本における悲劇的事件を理解し、日本民族の前に立ちはだかっている、地震と津波とそれによって引き起こされた原発事故の結果を克服するという課題の複雑さを、分かっているのかもしれませんが。核の惨事を通り抜けた私たちは、あなた方の不幸を自分のことのように受け止めています。恐ろしい不幸の際にあなた方が失ったものについて、心からの同情をもって、慈しみを申し述べます。私たちは、世界的記念碑とも云える、破壊された日本の大地の前で、深く頭を下げます。私たちは、核の自然力の地獄の火口に身を投じた全ての人々に対して、そして、これらの人々に痛みをもって寄り添う全ての人々に対して、長いおじぎを捧げます。

私たちポーシェの事故処理消防士たちは、全てのウクライナの人々と同様、フクシマの悲劇の記念日にあたり、「日本の人々とともにある」ということを宣言したいと思います。

【第1部】 2012年度定期総会

2011年度活動報告 および 2012年度活動計画

【第2部】

「菜の花プロジェクト」報告… 河田昌東さん

2007年にスタートした菜の花プロジェクト。

想定をはるかに超えた試練を乗り越え、菜の花畑の未来は、4畝から250畝へと拡がろうとしている。そして、BDFやバイオガスがウクライナの人々の関心を集めつつある。また、福島原発事故で注目を浴びることとなった菜の花による除染の効果は…など、必見の報告です。

【第3部】

「放射能測定センター・南相馬」活動報告

… 池田光司さん・神谷俊尚さん

2台の放射能測定器を配備し、いよいよ本格稼働した放射能測定センター。現在の南相馬市の状況を盛り込みながら、その測定結果と今後の問題点や方向性などをお話します。





南相馬報告 (神谷 俊尚)

4月16日に、南相馬市では20Km圏内の警戒区域が解除されました。ほぼ全域が「避難指示解除準備区域」となり、住民の自由な立ち入りが認められました(ただし、宿泊は認められていない)。原町区南部と小高区全域が、被災時のままで、水道等のインフラも未整備での解除に、大きな疑問があります。

地震と津波被害で、地盤沈下して巨大なため池と化した浦尻地区や、地震被害が甚大な駅前通り、少し山に入れば地割れし

た道路、原発事故により、壊れた屋根瓦にブルーシートをかける暇なく避難をさせられた為、家に雨水が入り込みカビだらけの家屋、これらの対策が何もなされないままに、解除ありきの国・県・市の方針に、住民の不安は募っています。その上政府は、5月14日に「宿泊を伴わない事業所に、市町村長の判断で事業再開を認める」ことを通達しました。これにより、コンビニ・商店・工場事業所は、市町村に申請すれば再開できることになりました。南相馬市桜井市長は「復旧・復興に取り組む上で一歩前進」と評価しましたが、川内村長は「人が戻ってこない地域では、事業所が再開しても採算が取れない」として、除染の推進を求めています。またしても、被害者の分断です。市民を身近なところで守るべき市行政が、歓迎の態度を示す対象は、市民の安全と健康ではなく、自らの行政と職員を守る事以外の何物でもありません。

本年4月1日現在、南相馬市居住人口は42,000名強(震災前71,000名)、住民票登録人口65,000名。一方、18歳未満の避難者数は、県内避難1,969名、県外避難3,637名、計5,606名(昨年3月現在18歳未満人口11,712名)と、およそ50%の子ども達が母親と避難しており、父親の仕事を含め、家族のコミュニティー・地域のコミュニティーが、スタブタに分断されています。今なお、除染活動が一切行われていないのが、現地の状況です。

チェル救は、昨年2回「南相馬市汚染マップ」を発表しました。今年度も2回測定します。4月に原町区、鹿島区と実施し、警戒区域解除後、20Km圏内の測定も実施しました。小高区の測定に関しては、現地の詳しい状況がつかめないうち、500mメッシュに基づいての測定作業でした。地盤沈下・橋の崩落・道路の地割れ・倒木等々で、測定不能の箇所が多くありましたが、小高区内住民の協力もいただき、無事に終了しました。測定結果報告とマップ発表は、6月早々に現地(並びにホームページ上)で行います。詳細は、池田さんの記事(P5)を参照してください。

「放射能測定センター・南相馬」は、12月と3月末設置した2種類の機器を使用して、食品・水・土壌の測定を行っています。5月中旬迄に、約420検体の測定を実施しました。原町区・鹿島区の5水源の月2回定期測定も行っています。警戒区域解除以来、井戸水の測定依頼が多く、市民の心配されている様子がかがわれます。市も、学校・生涯学習センターに、機器と測定員を配置して、測定を行っていますが、「食品のみ」に限定し、水・土壌の測定は拒否しています。私達は全てをトータルに測定する事で、測定所の真価も問われてくると考えています。当初から、「A&S福島」が運営する「放射能測定センター・南相馬」と位置付けましたが、2月の「南相馬ダイヤログ」、春休み・GWの子どもと遊ぶ「みんな共和国」という企画に参加する中で、担当者は、より積極的に関わりたいという思いも膨らみ、測定所業務に支障をきたす場面も出てきました。5月に入り、それらの点を真摯に話し合い、運動の流れをお互いに止めることなく進めるため、6月からは①「放射能測定センター・南相馬」は測定ボランティアの方々とともにチェル救が責任を持って維持・継続していく、②「A&S福島」は、「みんな共和国」を発展させていくという事で、お互いの役割分担をしていこうと確認し合いました。

チェル救は、近日中に「放射能測定センター・南相馬」のホームページを立ち上げ、順次測定結果の報告も行っていく予定です。



〈地盤沈下して巨大な沼地と化した田畑。測定地点は、なかなか定まらない。〉

第Ⅲ期「南相馬市放射線量率マップ」完成 !! (その結果と考察)

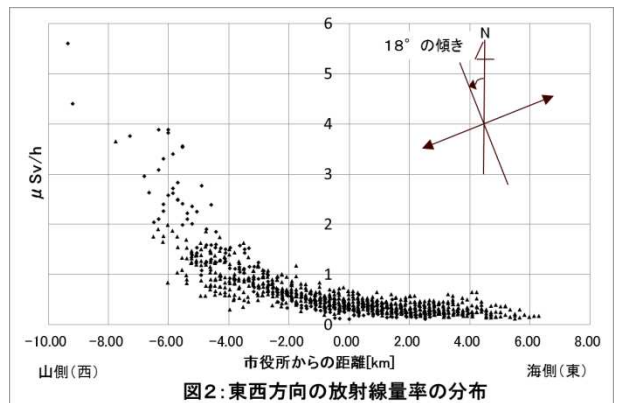
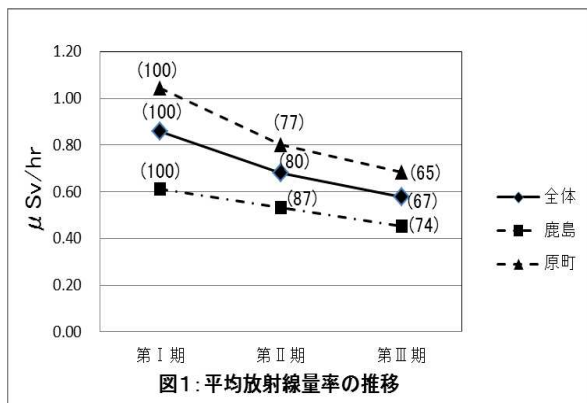
(池田 光司)

昨年6・7月(第Ⅰ期),10・11月(第Ⅱ期)に続き、第Ⅲ期の南相馬市の空間放射線量率[$\mu\text{Sv/h}$]の測定を行いました。4月14・15日に原町区、4月21・22日に鹿島区、そして、4月30日・5月1日に小高区の測定を行いました。4月16日に20km圏内への立入りができるようになったのに伴い(警戒区域→避難指示解除準備区域)、はじめて小高区の測定が可能となり、南相馬市全域にわたった放射線量率マップが完成しました。マップは、第Ⅰ期、第Ⅱ期と同じく500m四方のブロックに区切られており、高さ1mの放射線量率のレベルに応じて色分けがしてあります。測定は、各ブロックの中心付近の1点を定めて高さ1cmと1mで行われましたが、20km圏内の測定を行ったこともあり、測定ブロック数は第Ⅱ期の579から876へと、1.5倍に増えました。

今回の測定のポイントは、まず、「第Ⅰ期、第Ⅱ期と比べて、どの程度放射線量率が下がったか」ということと、次に「小高区の状態がどうなっているか」ということでした。

図1に、平均放射線量率の推移を示しました。平均放射線量率は、原町区と鹿島区ともに下がり、全体としては、第Ⅰ期の値を100とすると第Ⅲ期は67となりました。計算上は、放射性セシウム238の物理的な半減期の2.8倍の速さで放射能が減っていることとなります。

また図2に、東西方向の放射線量率の分布を示しました。第Ⅰ期と同じように、真北から西に 18° 傾いた方向(飯館村に向かう方向)を南北とし、その直角方向を東西として、各ブロックの放射線量率を、20km圏内(原町区の一部と小高区全域)のデータも含めてプロットしました。すると、第Ⅲ期も第Ⅰ期と同じようにデータがきれいに並び、海側(東)から山側(西)に向かって放射線量率が高くなる傾向が表れました。元々この傾向は、福島第一原発からの距離に関係なく、爆発時に飯館村に向かって流れた風に乗って放射性物質が運ばれ、その風の通り道に近づくほど、多くの放射性物質が地上に降り注いだことを示すものでした。その傾向が1年以上経っても残っていること、そして20km圏内も同じ傾向にあることが、今回の測定で明らかになりました。



環境半減期という考え方がありますが、地上に降った放射性物質が雨で流されたり、土中に浸透したりすることで、物理的な半減期よりも早く放射性物質が減るというものです。今回のデータもそのことを示していると考えられます。ただ、全体としては、放射性物質は当初の分布を保ったまま減っており、測定の多くはアスファルトもしくは砂利の道路で行っていることを考えると、放射性物質が減るメカニズムが他にもあるように思われます。放射性物質がどのようにして減っているのか、言い換えれば、放射性物質がどこに移動したかを明らかにしていくことは、今後の重要な課題です。

なお、マップはチェル救のHP(ホームページ)で見ることが出来ますので、是非確認してみてください。第Ⅰ期・第Ⅱ期のマップと比べると、変化の様子がよく分かります。

また、マップをご希望の方は、事務局までお問い合わせください。

今回も、貴重な結果を得ることができました。この場をお借りして、測定にご協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。次回測定は10月の予定です。

特集!!

「原発ゼロ」の日に思う

「原発ゼロ」の生活は、痛くも痒くもないのだ!

(長野県 南箕輪村 原 富男)

5月5日、原発ゼロの日がやってきた。あれほど待ち焦がれた日だというのに、「忙しいばかり」の毎日に埋没し、そのことさえ忘れていた。「原発が停止すれば生活が成り立たなくなる」という、国や電力会社の言い分にも関わらず、私の生活は「昨日は草刈」「今日は溝にはまった猫の救出」「明日は雨漏りの修繕」…と、「何とか生活は成り立って」いる。



直接「原発ゼロの日」とは関係ないのだけれど、15年前に取り付けた太陽光発電の移設の仕事が10日ほど前に終わった。お客さんは、実はチェルノブイリの仲間である伊那市の小牧さんである。15年ほど前に蔵の屋根に設置したのだが、瓦の下地の変形もあり、地震が来てパネルがずれ落ちると困るので、同じ敷地内にある駐車場の屋根に移設したのだ。前に設置したときには、若いアルバイト衆が3人ほど働いてくれたのだが、今わが社は、私と女房しかいない。

先ず、コンパネと角材で長い滑り台をこしらえて屋根に立てかけ、外した太陽光発電パネルにロープをつけ、滑らせながら下すのだ。パネルを壊してはいけないので、慎重な作業だ。1枚85Wのパネルが40枚(8枚直列、それを5セット並列にする)を全て降ろし、架台のアルミ形鋼などをすべて外す。今度は、駐車場の屋根にこの形鋼で架台を作る。当時は既成品の架台が無かったので、全てアルミ形鋼を加工して作ったのだ。今回も、「もったいない」のでこの形鋼を再利用することにした。架台ができると、架台の上に「墨付け」をして、パネルを設置した時に曲がらないようにする。パネルは、降ろした時の逆で滑り台に沿わせながら、ロープで1枚1枚引き上げる。次に、パネルを8枚分取り付けながら結線する。この時、必ずプラスとマイナスを結線しなければならない。間違えると大変なので2重3重に点検し、電線の端に1ブロックのプラスとかマイナスの札を貼っておく。これをターミナルまで引っ張っていき、間違いなく結線する。

そこから先は、パワコンまで太い電線を空中や軒下に配線するのだ。全て終わるのに、2人で1週間近くかかってしまった。冷や冷やのスイッチオン、あれっ? パワコンにエラー表示が出る。失敗したかと思いきや、パワコンのスタート時間の遅れによるものと判明。そのうちに、売電用電力メーターのドーナツ盤が動き出す。やれやれでした。失敗は許されないもので、何度か女房を叱りつけたりで、設置場所変更工事は終わった。女房を叱りつけてしまったので、暫くは外食に連れて行ったりと、私も大変なのだ。その分の加算工事料は、いただいていない。

パワコンだけは、電気屋さんに取り付けを依頼したが、この電気屋さんは15年前に依頼した電気屋さんの2代目で若い。当時は太陽光発電自体珍しく、伊那でも初めてか2番目の設置であった。この電気屋さんに、太陽光発電の見積書の書き方を教えてくれと頼まれ、雛形を作ってあげた記憶がある。パワコン設置後、2代目に小牧邸の裏にあるマイクロ水力発電の説明をしたところ、興味を持ったようで、自然エネルギー「オタク」と「2代目電気工事士」の付き合いは続きそうである。

15年前、何とか「原発に頼らない生活をしたい」と考え、伊那では試行錯誤してきた。小牧さんは「太陽光発電とマイクロ水力発電」、小野寺さんは「バイオガス(メタンガス)」、私は「風力発電」。当時を振り返り、よくやったものだと感心する。チェルノブイリの「菜の花プロジェクト」の一部であるバイオガスは、小野寺さんのバイオガスの経験があつての成果でもある。ここで告白ですが、チェルノブイリの命令によりオブルチにバイオガスプラントを作ったのですが、私は小野寺さんのバイオガス作りの時は、バイオガスキャランの桑原さんの3番目の助手で、現場作業中心、ほとんど経験のないままに設計をしました。一番困ったのは、設計におけるドームの体積の出し方です。未だに「九九」が上手く言えず、割り算さえできな

いのに、ドームの体積計算ができるはずはありません。いろいろな本を買っても、解らないものは解らないのだ。思い余って、反原発の仲間で高校の数学教師をしている和田さんに、恥を忍んで教えてもらい、ようやく計算ができるようになったのだ。

「原発ゼロ」の生活は、我々にとって痛くも痒くもないことである。我々の試み（自然エネルギー）が例え上手くゆかなくても、少し電気を我慢すればいいのだし、中古の太陽電池のパネルは既に唾を付けてある（いつでももらえる）のだから、心配はいらない。電気が中電から来なければ、早寝早起きができ、朝は畑の手入れがはかどるといふものだ。薪は、嫌というほど庭に積んであるのだ。以前、自宅の「風力と太陽光発電」だけで生活したことがあるが、夜9時頃になるとテレビの明かりが、ぼや〜と暗くなり切れてしまうのだ。この時、中電の電気のスイッチを入れるか入れないかで悶々としたのだが、テレビや照明がぼや〜と消える状態は、何とも新鮮でコミカルであった。

「縄文採集生活」を守る

（小牧 崇）

今年はいつまでも寒さが残ったので、春がいきに来た。フキノトウから始まって、ウド・筍・コゴミ・コシアブラ・ミツバ…、家の周囲で採集した（山）菜が、連日食卓を賑わす。これを写真におさめ、「救援・中部」のHPで紹介することになってあらためて気づくのは、お金は無くても豊かな生活はあるということ。そして、お金の換算できない豊かさを脅かす存在が、原発（事故）であるということだ。採集生活は、豊かな自然があって成り立つ。私の住む長野県南部は、諏訪地方を中心に、5千年前頃には縄文文化の中心として栄えていた所だ。当時はどれくらい豊かな自然が広がっていたのだろうか。想像するだけでも心が和む。こうした地域が刻んだ歴史を受け継ぎながら、野のもの・山のを産物として生かしているこうという動きが、最近出始めている。自然の恵みを大切に生かす食文化の伝統は、長年つきあっている北ウクライナの農村地帯にも脈々と流れていた。夏から秋、彼らは周囲に広がる森に入り、ベリー類やキノコを採集し食卓に彩りを添えていた。しかし、原発事故はこうした豊かさを根底から覆した。東北地方の山里でも、同様の悲劇が繰り返されている。私は「採集」に片足を置く現在の生活スタイルを、更に深化させたいと思っている。そのために、電源は原子力から自然エネルギーに大胆にシフトしてほしい。すべての原発がとりあえず止まっている「今」こそ、その時ではないだろうか。今年、10年来試みている農業用水利用の小水力発電に、パネル1枚分の太陽光発電を加えた。その結果、独立系電源として安定し、利便性が増した。全国送電網を共有し、補い合う仕組みをつくることで、自然エネルギーは充分その役割を果たすと思う。

我々世代の責務

（大谷 早苗）

今年5月5日（子どもの日）、日本にある54基の原発がすべて運転停止になりました。こんな日をどれ程待ち望んだことでしょうか。でも何故か喜べないのです。一時停止とか、いつか再開されるのではないかと、といった不安があるからではありません。今年の4月、チェルノブイリ「放射能測定隊」の一員として、福島汚染地に入りました。昨年3月11日以来、テレビ・新聞などの情報で、何度も目を覆いたくなる状況は観てきましたが、実際に自分の目で見て、はだで感じるものは全く違いました。あまりにも無惨で胸が苦しくなり、いかりと悔しさがこみ上げてきました。地震と津波、そして放射能で汚染された大地が、目の前にあります。そんな中で、田んぼのあぜ道そして川の土手には、フキノトウが誰にも摘み取られずに、首を長くして花になっていました。これから先、子ども達が引き継いでいく豊かな大地に、私たちは取り返しのつかないことをしてしまったのです。

福岡にいる友達が、今年の年賀状に書いてきました。『昨年の福島原発事故後、おそろおそろ脱原発集會に参加しました（33基以降、運動を中止して、うしろめたさがあったから）。しかし「うれしかった」。たくさん若い力が結集していました。我々世代の責務なのに…。』すべての原発を再稼働させないために、私のできることで頑張っていかなければと思っています。



自分の残りの人生の年月を計りながら、前を見る

(戸村京子)

チェルノブイリ原発事故以後、日本で地震が起きるたびに、「近くの原発は大丈夫か」「異常は起きなかったか」と心配してきた。地震学者石橋克彦さんが警告してきた「原発震災」という言葉が、頭から離れることはなかった。また、反原発科学者である故・瀬尾健さんの各地の原発事故シミュレーションの本も、常に本棚の手の届く位置に置いてあった。チェルノブイリから学んだことのひとつ、「放射能は風下に流れる、川に沿って流れる、狭い日本でウクライナのように逃げるところはない」と肝に銘じ、脱原発・反核しかないと主張してきた。時に人は「まだチェルノブイリって言うてるの？ まだその活動続けているの？」といったものだが、チェルノブイリ事故の被害に苦しむ、ウクライナの人びとと長くお付き合いする中で、放射能の被害は20年、30年、それ以上に続く「現在進行形」を実感してきた。チェルノブイリ事故後は、浜岡原発への反対運動や原発事故の避難訓練もやった。伊方原発出力調整実験反対に行き、泊原発建設反対の署名活動などもした。福井の原発からの風船飛ばしにも、子どもと一緒に参加した。チェルノブイリ事故というものが何であり、どういう社会となったのか、被災者支援のNGOとして、どうしたら有効的に支援活動が行えるのか、被災地の人びとの復興・再生ができるのだろうか、大学院でも少し研究といえるか模索をした。また再びどこかで、原発事故が起きて放射能被害が出るようなことがあってはならないと思ってきた。

3.11 東電福島第一原発の原発震災が起きてしまって、一気に無力感に襲われてしまった。そしてどこか、何かに冷めている自分がいる。要するに、これまで恐れ逃げたいという気持ちが現実世界となってしまう、改めて逃げ場がない、向き合っていくしかないと腹が据わってしまったのか。全原発が止まっても、使用済み燃料があり、その先が解決していないのだからうれしくもない。

さあこれからどれだけの年月、福島の人びとに思いを寄せてやっていけるのだろうか、自分の残りの人生の年月を計りながら、前を見る。

がれき問題と鎌仲ひとみ監督「内部被ばくを生き抜く」上映会

(橋本 京子)

「震災がれきの受け入れ」を決めた大村知事は、3月9日、処理施設の建設に向けた調査費など6億円を支出する為に、議会の議決を経ない「専決処分」をしました。そして、「名古屋港管理組合所有の名古屋港南5区2工区(知多市)」「中部電力碧南火力発電所(碧南市)」「トヨタ自動車田原工場(田原市)」にある既存の廃棄物処理場内を候補地とし、焼却灰を埋める最終処分場や焼却炉、がれきの仮置き場を整備するという計画です

昨年秋、「学校給食を放射能汚染から守る要望書」を市に提出した、「豊橋いのちと未来を守る会」と「豊川のちと未来のネットワーク」の若いお母さん達が、すぐに動きました。がれきの広域処理に対して、市長がどう考えているのか、どう対応するのかを問う「公開質問状」を提出。さらに、東三河8市町村からなる「東三河広域協議会」のがれきの現状調査に対して、調査内容の要望書も提出。現在に至るまで、数々の勉強会や講演会をしてきました。そして5月13日、「東三河広域協議会」はがれきの受け入れの可否を決定する段階ではないと表明。ところが、愛知県がトヨタ自動車と合意して処理をやるとなった場合、田原市はそれを止める権限がないというのです。ここで、鎌仲ひとみ監督の「内部被ばくを生き抜く」の上映会です。田原でやります。「田原子どもの未来を守る会」と「地域未来の会」とわたしたちの「さよなら原発東三河ネットワーク」の共同主催です。なんと、鎌仲ひとみさんの講演付きです。がれき問題と内部被ばくは、切り離して考えられない問題です。田原市・豊橋市は、日本でも有数の農業生産地です。「サラダプロジェクト」というグループが、南相馬の学校給食に野菜を届け続けています。昨年、「鎌仲3部作」「第4の革命」これで5本目の映画会です。いいのかなあ、映画に頼ってばかりいて。



ミシェル・フェルネクス 広島講演会に参加して (竹内 雅文)

原子力発電所の重大事故は、破局の始まりであり、終結などどこにもない。事態は、むしろ年を追って進行していくであろう。チェルノブイリがそうであった。福島でも、そういう過程が、今、展開しているのである。それを前にして、日本の人たちは、手をこまねてはいけぬ。嘘に溺れてはいけぬ。生命を守るために、やるべきことを見出し、立ち向かうようであって欲しい…。

83歳の老医学者、ミシェル・フェルネクスが日本にやってきた。被曝都市広島は、内部被曝の重大さを否定する人びとに事欠かないが、5月16日に平和研究所に集まった人たちはそうではない。日本語字幕が完成したばかりのチェルトコフの「真実はどこに」の衝撃に続いて、静かに席に着いた欧州エコロジーの重鎮を場内の熱い熱気が取り囲む。

放射線の影響は、通常の遺伝的損傷には見られない、「初代より二代目」「二代目より三代目」というように、代を追ってますます大きな影響が現れるという特徴がある。ベラルーシでは、チェルノブイリ後の田鼠の観察等から、22代にわたって、そのことが確かめられている。人々はこれまで、染色体やゲノムの放射線による損傷に注目してきた。しかし、原形質内の他の部分、たとえばミトコンドリアが損傷した場合はどうか。通常、染色体の等分割に失敗した細胞には死がプログラムされているのだが、その仕組みはミトコンドリアが損傷していれば動かない。そうした、まだまだ研究不十分の広大な領域があり、その中に、内部被曝による累代増進的な遺伝損傷を理解する鍵があるのだろう。

今、緊急なのは、損傷の体内での進行を何とか食い止めることだ。代表的な方向として二つある。第一は、体内に蓄積している放射性核種の排出促進である。吸着性のある物質を研究すべきである。代表例は林檎などに含まれるペクチンだ。胆汁はセシウムを回収して腸管内に排出するが、腸はそれを再吸収しようとする。それをペクチンが吸着してくれれば、排便時に体外に排出されることになる。複雑な構造の多糖類であるペクチンは分子が大き過ぎて、大半は吸収されないまま外に出ていくのだ。しかし、ペクチンの一部は腸内細菌の働きによって、分解され、吸収もされる。そうしたペクチン由来の多糖類片は、体内各所でセシウムを吸着して尿として排出されやすくする。日本の場合には、コンブなどから抽出可能な別の多糖類(アルギン酸)も有望な物質であり、緊急に研究されるべきだろう。

もう一つの柱は、抗酸化物質である。人体の組成の大半を占める水の分子が放射線によって分解されると、遊離した状態の酸素・水素・水酸基などが生成し、体内の様々な要素を酸化させ、老成させていく。これを食い止める物質も早急に見出す必要があるが、有望なものとしては、たとえばイチョウ抽出物がある…。研究課題の具体的な提示に満ちた時間の共有を可能にしてください、広島の皆さん、どうもありがとうございました！

本の紹介 「チェルノブイリ 未来から示されたサイン(¥500/冊)」 スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ



本書(左)は、2003年に来日し各地を講演した、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチさんの講演録の再版です。あの時の講演会で、アレクシエーヴィチさんは「チェルノブイリ後生き延びるには、新たな世界観を打ち立て、伝えていく新たな言葉が必要です」と話しました。それは、「消費や便利さよりも、命を大切にしなければいけない」という大切な助言でした。そして2011年3月11日、「フクシマ」によって他人ごとではなくなりました。ここに書かれている事は、たった今の「フクシマ」そのものです。

今、私たちに課せられていることは、チェルノブイリ事故を教訓として、一刻も早く、原子力に頼らない新たな世界観を多くの人々と共有し、持続可能な社会への扉を開くことです。もう一度…いえ、何度も読み返して、チェルノブイリからの教訓を思い出してください。きっと思い当たることたくさんあるはず。この本の売上金は、福島支援に当てられます。(美)



〈ミシェル・フェルネクスさんと

竹内雅文さん(通訳)〉

竹内さんのウクライナ便り

収監されていた刑務所で看守に殴打されたと主張し、抗議してハンストに入っていたティモシェンコ元首相の件で、欧米からの圧力が強まり、同氏はハリコフ市内の病院に収容され、暴行事件前から悪化を訴えていた椎間板ヘルニアの治療を受けていますが、欧州議会ではその後も、彼女を初めとするウクライナでの「政治犯」解放を求める決議が、改めて採択されています。欧州議会の議員らが入院中の同氏を訪れ会見、あるいは、アメリカ国務省の人権レポートでウクライナが批判されたというニュースもありました。私は4月末、たまたまフランクフルトの空港で、待合スペースに無料で置かれていたドイツの新聞を目にする機会があったのですが、ティモシェンコ氏の件は、各紙ともちょうど大きく取り上げていました。一方最高会議では、与党が提出した、ロシア語をウクライナ語同様に第2の公用語として認めるという法案の審議が紛糾、議員らが乱闘を繰り広げるという事態が発生。ロシア語にソ連時代認められていたこの地位を、ウクライナの27州中13州で回復するという公約は、選挙の度に現与党「地域党」が掲げながら、結局今まで実現していなかったものですが、この時期にあえて審議が行われたのは、国内外で支持を失いつつある現政権が、そもそもの選挙地盤であるロシア語話者の多いウクライナ東・南部の有権者の人気を確保しようと、危険な賭けに出たのではないかと私は勝手に臆測しています。ちなみに首都のキエフでも、日常会話でロシア語を使用している人は未だに多いのですが、全国的には世論調査で「ウクライナ語が母語」と答える人が7割を超えています。

さて、今年度のサッカー欧州選手権大会が、ポーランドとウクライナで6月から7月初めに行われることになっており、それにあわせ各種の建設工事が行われていること、大会開催に伴う汚職につき野党寄りのメディアから批判があったものの、例によりうやむやになっていることは、以前にも拙稿で書いた通りです。ポリスポリ国際空港の新ターミナル工事（日本の



〈日本からのメッセージを伝える(2012.2月)〉

ODAによる)や、キエフから西方のジトームル市に通じる幹線道路の工事などが、私の目にする機会が多いものですが、いずれも5月半ばの段階で未だに完成の様子がありません。果たして間に合うものかどうか。表向きは間に合ったことにしておいて、後から追加工事を行う、というのも、これまでの同様の事例から判断すればあり得るのですが。それはそれとして、私がふだんよく利用する地下鉄では、車内放送（「次は〇〇駅です」）がウクライナ語の後に英語でも繰り返されるようになりました。また車内の路線表示図も、ウクライナ語表記だけでなく英語表記のものが別途掲げられ、さらに地下鉄駅の構内あるいは出入口付近には、周辺の地図が英語表記入りで出現しました。これらは上記の大会のおかげであり、これまでウクライナ語を知らない外国人には利用が容易とは決していえなかった地下鉄が、だいぶ利用しやすくなったと思われます。しかし、同大会にあわせた各種のイベントが都心では盛んに行われるようになり、また観光客が増えて、キエフの一般住民にとってはいくぶん煩わしいのも事実です。副首相の皮算用によれば、大会開催期間中に百万人を下らないサッカー・ファンがウクライナを訪れる見込みだとか。スポーツや競争ごとにそもそも関心のない私としては、この時期市内に多いポプラの綿毛が空中浮遊、あるいは路傍に白く吹き溜まっているのをやり過ごすのと同じように、ただやり過ごしているだけですが、その昔の東京オリンピックの頃の東京の雰囲気はどのようだったのか、つい想像してみたくなります。 (5月25日)

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2011年度 収支報告書 (2011.4/1～2012/3.31)

項 目		金額(円)	項 目		金額(円)
経常収入の部			経常支出の部		
寄付金収入		19,784,225	事業費		22,399,754
粉ミルク支援事業	510,000		粉ミルク支援事業	387,276	
被災者支援事業	256,000		医療機関支援事業	1,107,869	
ナロジチ再生プロジェクト (菜の花プロジェクト)	290,000		被災者団体等支援事業	1,115,546	
福島原発被災支援事業	6,940,070		ナロジチ再生プロジェクト	6,809,814	
一般	11,788,155		文通・クリスマスカード事業	152,380	
会費収入		600,000	福島原発被災支援事業	10,923,440	
正会員	43,000	通信誌発行事業	783,855		
賛助会員	557,000	イベント関連事業	119,574		
助成金収入		11,564,210	業務委託事業	600,000	
三井物産環境基金	4,500,000	駐在員事業	400,000		
三井物産環境基金 東日本大震災復興助成	6,664,210	管理費		3,954,805	
高木仁三郎市民科学基金	400,000	給料手当	1,909,916		
事業収入		1,787,170	通信費	177,258	
福島原発被災支援事業	1,777,170	荷造運搬費	82,565		
イベント関連事業	10,000	旅費交通費	120,550		
雑収入		897,894	会議費	35,850	
物品販売	35,540	消耗品費	355,552		
その他	862,354	新聞図書費	288,960		
受取利息		3,265	印刷製本費	156,558	
			修繕費	17,300	
			地代家賃	600,000	
			租税公課	700	
			諸会費	58,000	
			支払手数料	104,796	
			雑費	46,800	
			経常支出合計	26,354,559	
その他資金収入の部			その他資金支出の部		
その他資金収入合計		0	その他資金支出合計		6,625,152
その他資金収入	0		食品測定器購入支出	6,438,652	
			事務機器購入支出	157,500	
			過年度修正(電話加入権)	29,000	
			当期支出合計	32,979,711	
当期収入合計		34,636,764	当期収支差額	1,657,053	
前期繰越収支差額		9,669,266	次期繰越収支差額	11,326,319	
正味財産増加の部			正味財産減少の部		
正味財産増加額合計		8,282,205	正味財産減少額合計		581,706
当期収支差額	1,657,053		減価償却額	581,706	
食品測定器増加額	6,438,652				
事務機器増加額	157,500				
過年度修正(電話加入権)	29,000				
当期正味財産増加額		7,700,499			
前期繰越正味財産額		9,669,266	次期繰越正味財産額		17,369,765

【注記】収益事業はありません。

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

平成 24年 4月 16日 監査人 神野 美知江

事務局便り

疾風怒涛の如く過ぎていった 2011 年度を経て、事務局は 4 月、助成金を執行した後の報告書作りに追われた。ナロジチ再生・菜の花プロジェクトへの助成である「三井物産環境基金 2009 年度第 2 回活動助成」(4,500,000 円)、東京電力福島第一原発被災地支援の助成である「三井物産環境基金 2011 年度東日本大震災復興(活動)助成」(6,664,210 円)の報告書作りである。様々な助成団体への何年にもわたる報告書作成作業で、いくつかの苦い経験を経て学習し、作業はほぼ順調に進んだ。また、理事の池田さんは、「高木仁三郎市民科学基金」への報告書作りを一人で担った。ナロジチ再生菜の花プロジェクト最終段階の、バイオガス製造後の廃液処理への助成(40 万円)の報告書である。これらの助成と多くの方々のご寄附は、被災地への大きな支援となっている。(山盛)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方

「救援・中部 お宝ネット」宛

TEL 0265-73-9355

Fax 0265-73-9352

「収支報告書(P11)」の様式が一部変わりました!

2011 年度は、新しく福島支援事業が加わったことで 2 千万円近い寄付金が集まりました。本当にありがとうございます。皆様のご支援により、高額な食品測定器を 2 台購入することができました。購入した食品測定器の代金は、「その他資金支出の部」に計上しています。なお、この食品測定器は、固定資産として管理していくこととなりますので、「正味財産増減の部」を新たに設けました。今後 5 年間で減価償却していくこととなります。そのほか、ウクライナ関連の事業については、ほぼ前年どおりの支出となりました。粉ミルク支援事業は、2010 年度に集まった寄付金をウクライナへ送っています。2011 年度に集まった粉ミルク支援金は、2012 年度に送ることとなります。今期は、寄付金や会費・助成金などで、なんとか事業費等をまかなうことができましたが、前年度までの繰越金に頼るところが大きく、皆様からの支援により支えられています。今後とも、皆様からの温かいご支援をよろしくお願いいたします。(兼松)

編集後記

☆金環日食といえば、幼き頃見た「ムーミン」のニョロニョロの怒りを思い出す。なぜニョロニョロが怒っていたのかは思い出せない。「おし〜えておじいさん♪」(←これはハイジ)懐かしカルピス劇場。(佳)
☆豊かな生活ってお金がたくさんあるってことじゃないよね。いかに安穏と毎日を過ごせるのか?ということだと思う。HP で紹介している「縄文採集生活」は自然と共存する、まさに心豊かな生活。私にもできるかなあ…まず、庭の草取りと玄関周りの蔦を刈ってからよね。ああなんて現実的な生活。(美)
☆いよいよ、「G5(米・英・仏・独・伊)の金融マフィアとその隷属国」VS「BRICS とその支持国」という図式が、明白になってきた。地球上には 200 近い国(と地域)があるが、まさに 30 カ国対 170 カ国という圧倒的な差がついている。(情けないことに、日本はいまだ前者にしがみつく奴隷国家のままである。)5 月は、欧州で金融危機や政変が相次いだ。前者が追いつめられている証拠である。残念ながら金融マフィア達は、今なお強大な暴力手段を持ち、世界に脅しをかけている。しかし、6 月以降は、99%の民衆が 1%に立ち向かう出来事が、世界各地で起きることになるだろう。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473